

Title	林栄美子教授 自筆略年譜；研究業績一覧
Sub Title	Chronologie et travaux du professeur Hayashi Emiko
Author	
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.60 (2015. 3) ,p.5- 13
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Suzuki Junji et au professeur Hayashi Emiko = 鈴木順二教授・林栄美子教授退職記念論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20150331-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

林 栄美子教授 自筆略年譜

- 1954年7月 東京都世田谷区に生まれる。
- 1961年4月 慶應義塾幼稚舎に入学。この時から2015年3月に退職するまで、54年もの時間を慶應で過したことになる。塾内校の自由な気風のなかでのびのび育ったが、同じ交友関係だけに終始しないよう、狭い価値観の中に留まらないよう、進んで他に友達を作り、多様なものに興味を持ち、慶應を客観的に見るように努めてきたつもりである。しかし一つだけどうにもならないことがあって、大学スポーツを見るときは、必ず慶應を熱く応援してしまうのである。
- 1973年4月 慶應義塾大学文学部に入学。慶應は学園紛争の最終段階の学費闘争が終息しておらず、日吉はまだバリケード封鎖中だったので、5月から語学の授業だけが三田キャンパスで始まった。秋にようやく日吉で授業が始まったので、実は一般教養科目は半年しか受講していない。女子高時代から19世紀のフランスやロシアの小説を耽読しており、慶應には露文科がないので、漠然と仏文に行こうかと思っていたが、大学に入ってサルトルやカミュを読みだしてすっかりはまり、断然仏文に行こうと決めた。当時は仏文科が華の時代の終りにさしかかるころで、まだ1学年の終りに選抜試験があったが、何とか無事に受かった。
- 1974年4月 慶應義塾大学文学部フランス文学科に入る。大学2年の春からサークル活動に参加。スキーマの同好会と演劇研究会。この時期に演劇にふれたことは、その

後の自分の価値観や美意識に大きく影響したと思っている。俳優や舞台監督や照明係として演劇の内側を体験しただけでなく、70年代小劇場運動の様々な舞台に出会うことができた。演劇や舞踊などの生の舞台を見ることへの偏愛は、この時期に始り、今に至っている。

フランス文学については、ヌーヴォーロマンに出会って衝撃を受け、ミシェル・ビュトールの作品を卒論のテーマとすることに決めて、若林真先生のゼミに入った。

1977年3月

慶應義塾大学文学部フランス文学科を卒業。

前年秋に、就職するか大学院に進むか迷ったまま就職試験を受けに行き、難関といわれた出版社の一次試験に合格して喜んだのもつかのま、途中で不合格になり、生涯でほとんど最初の受験勉強をするはめになる。

1977年4月

慶應の大学院文学研究科フランス文学専攻修士課程に入学。

一生のうちで最も懸命にフランス語の勉強をした時期だろう。原書を読む力がようやくついてきたと実感できるまでは、結構つらかった。それでも、友人と思いきり文学の話ができるという、夢見ていた環境に身をおけて満足だった。ビュトールのヌーヴォーロマン時代の小説のなかで一番好きだった『時間割』を修士論文のテーマにした。

1979年4月

慶應の大学院フランス文学専攻博士課程に入学。

奨学金がいただけたので、念願の一人暮らしを始める。好きな本と演劇と音楽（とお酒）と共に過ごせた、とても幸せな時期だった。

このころ、仏文の大学院生が中心となって草野球チームが作られ、スコアラーとして参加。小金井の理工学部跡地で時々試合をした。このチームが呼びかけて、慶應の

- フランス語教師チームと東大駒場のフランス語教師チームの試合も実現した。
- 1982年3月 博士課程を単位取得満期退学。
- 1983年4月 慶應義塾大学経済学部助手に就任。
永戸多喜雄教授をチーフとする経済学部フランス語部会の個性的な先生方のなかでいろいろと鍛えられる。あとから考えても、とても良い時期に働き始めることができ、幸運であったと思う。
永戸先生を中心に結成された学際的研究グループ「20世紀芸術研究会」に早速引きこまれ、それなりに熱心に活動した。
- 私生活においては、就職する直前に結婚した夫の住む姫路市と東京の間を、学期中は毎週往復するという「通い妻生活」を始めることになった。この生活を現在に至るまで30年以上続けることになるが、そういう予測も覚悟もないままによく始めたものだと、我ながらあきれる。
- 1984年10月 「20世紀芸術研究会」の主催でメキシコの詩人オクタビオ・パスの公演会を日吉キャンパスで開く。会場からの質問に答える形での講演であり、学生からの質問も出るなど、活発な質疑応答が行われた。研究会員以外の教職員の協力もあり、80年代の日吉らしい催しであった。
- 1985年2月 慶應労組日吉支部の執行部に入り、情宣部長を経済学部
—1986年2月 現専任講師長沖暁子さんと共に務める。労働組合の活動をしたことで、日吉キャンパスは多くの職種の人々に支えられていることを知り、学部縦割りの構造のなかで学部や職種を越えた横断的なコミュニケーションを実現しようとする運動の大切さを実感した。普段の仕事においては出会うことのなかった方々との多くの貴重な出会いもあった。

- 1987年3月—1988年9月 塾派遣留学で、初めてフランスで暮らす。パリに在住。パリ第8大学の博士課程でジョルジュ・ライヤール先生の指導を受ける。サバティカル期間でパリ在住中の片山左京教授（当時）に、パリ生活の様々な手ほどきを受ける。演劇の都パリで、秋から冬にかけては劇場に通い詰める。87年の夏休みにスペイン旅行をし、闘牛と出会う。自分の後半生における最大の出会いだろう。留学中に三度訪れた後も、ほぼ毎年スペインを訪れるようになる。闘牛と諸芸術の関係、想像力空間における闘牛、についての考察がテーマの一つとなる。
- 1990年4月 経済学部助教授に就任。助教授昇格論文は、ヌーヴォーロマン時代から『土地の精霊』シリーズ時代に至る、ビュトールの作品群に描かれるパリを論じた「ミシェル・ビュトールにおけるパリ あるいはパリ変奏曲」である。留学中に意識的に写真を撮り始めたことをきっかけに、写真論・写真史も研究課題の一つとするようになる。自由研究セミナーでもこのころから写真をテーマとした。
- 1994年4月 経済学部の羽田功現教授が音頭をとって始まった「入学記念行事 心と身体と頭と……」の第一回企画として、世界的に有名な前衛舞踏家、大野一雄さんの舞踏公演を日吉の大教室で行う。企画段階から実行委員として参加し、教職員や学生の有志と共に公演を成功させた喜びは大きかった。一般の観客にも無料で公開したこの舞踏公演は、広く話題になり、大野さんご自身も大学での公演が気に入って、この後7年も毎春日吉で公演を行って下さった。いずれも忘れがたい舞台である。
- 1995年—1998年 日吉紀要「フランス語フランス文学」編集長を務める。

- この数年前から、当時の編集長であった経済学部の故小
 潟昭男教授に引き込まれて編集委員に名を連ねていたが、
 このころ初めて編集長を務める。正確に記憶していない
 が、この後も数年ずつ二三回編集長を務めたようである。
- 1999年4月 経済学部教授に就任。教授昇格論文では、ミシェル・
 ビュトールの『土地の精霊V』の一部をなすに至る『ピ
 カソ=迷宮』という作品の構造とその転生過程を論じた。
 このあと、ビュトールの作品に対象を特化するのをやめ
 て、ヌーヴォーロマンのような実験小説を、20世紀ヨー
 ロッパ文学というもっと広い視野のなかで見直そうと考
 え始める。
- 2001年4月 最初のサバティカル。パリとマドリードで暮らす。
- 2002年3月
- 2005年3月 長年患ってきた高血圧症が副腎腺腫のためと分かり手術
 を受けることになるが、その前に長年行きたい場所の一
 つであったロシアに旅する。
 若いころのロシア文学偏愛がこの少し前から復活して、
 現代ロシアの小説に出会いつつあったのとあいまって、
 印象深い旅となる。さらにバレエ公演を見てその面白さ
 に開眼し、偏愛の対象がもう一つ増えることになった。
- 2012年4月 二度目のサバティカル。主にパリとマドリードで暮らす。
- 2013年3月 初めて東欧諸都市にも足をのぼした。
- 2015年3月 5年ほど前から計画していた通り、選択定年により退職。

研究業績一覧

著書 (単著)

- 『砂の上の黒い太陽—＜闘牛＞アンソロジー』(アンソロジー構成・編集、一部訳) (人文書院、京都、1996年)
「メリメ+ゴージェ ^{カブリッチョ} 闘牛狂想曲」(ゴージェの翻訳と二人の作家の文章コラージュ構成)

著書 (共著)

- 『アンリ・マッケローニ作品集』(一部訳、構成・編集協力) (アートスペース美薔樹、東京、1993年)
「アンリ・マッケローニの手紙」(翻訳)
「エジプト」「女性器のバラード」(ミシェル・ビュトールの詩作品の翻訳)
「アンリ・マッケローニの作業にもとづいた現代美術の諸問題」(ビュトールの対談における発言の翻訳・構成)
「アンリ・マッケローニとクラインの空間」(レスタニーの評論の翻訳)
「制作解説 アンリ・マッケローニの歩み」(マントウ=ジニャックの解説の翻訳)

論文

- 『時間割』あるいは段階的変貌 (上)
(『経済学部日吉論文集』第32号、1983年11月)
- 『時間割』あるいは段階的変貌 (下)
(『経済学部日吉論文集』第33号、1984年3月)
- La Banlieue de l'aube à l'aurore* あるいは第一の変奏
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第4号、1987年3月)
- 郊外の薄明から暁まで (ミシェル・ビュトールの詩の翻訳)

- (『日吉紀要フランス語フランス文学』第5号、1987年9月)
5. ミシェル・ビュートルにおけるパリあるいはパリ変奏曲
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第10号、1990年3月)
 6. 『都会のアリス』をめぐるいくつかの断章
(『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第6号、1990年6月)
 7. 都市と写真—1900～1930年代—
(『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第7号、1990年9月)
 8. 『トランジットA—トランジットB (土地の精霊IV)』をめぐって (1)
—『土地の精霊』を追いかけて
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第18号、1994年3月)
 9. オクタビオ・パスと写真との出会い
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第19号、1994年9月)
 10. ビュートルの『パリ—ロンドン—パリ』とその変奏
(『慶應義塾大学藝文研究』第67号、1995年3月)
 11. 『トランジットA—トランジットB (土地の精霊IV)』をめぐって (2)
—〈パリのつむじ風の中の十三の駅〉を読む
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第20号、1994年9月)
 12. 『トランジットA—トランジットB (土地の精霊IV)』をめぐって (3)
—〈フレデリック＝イヴ・ジャネにあてた二十一通のメキシコ書簡〉を読む
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第22号、1996年3月)
 13. ビュートルの『ピカソ＝迷宮』およびその転生 (1)
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第29号、1999年9月)
 14. ビュートルの『ピカソ＝迷宮』およびその転生 (2)
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第30号、2000年3月)
 15. ビュートルの『ピカソ＝迷宮』およびその転生 (3)
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第31号、2000年9月)
 16. ミシェル・レリス作「闘牛」(第一部)(翻訳・解説)
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第34号、2002年3月)
 17. ミシェル・レリス作「闘牛」(第二部)(翻訳・解説)

- (『日吉紀要フランス語フランス文学』第35号、2002年9月)
18. 現代小説としての『テキサコ』
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第43号、2006年9月)
19. フィリップ・クローデルにおける死者／写真／人形
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第46号、2008年3月)
20. 『モレルの発明』あるいは影を追う影
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第49・50号、2009年9月)
21. 舞台上上がった「ヌーヴォーロマン」—演劇作品『ヌーヴォーロマン』
をめぐって
(『日吉紀要フランス語フランス文学』第58号、2014年3月)
22. 現代バレエ作品『カルメン』と闘牛のイマージュ
(『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第46号、2014年12月)

評論

1. ビートンあるいはしたたかなる軽み
(『ユリイカ セシル・ビートン—ファッション写真の半世紀特集号』、
青土社、1991年6月、pp.118-125)
2. 『高架道路に佇んで』あるいは「二重の廃墟」のアンサンブル (写真展
Arrêt sur Viaduc のカタログの評論)
(『デジャ=ヴュ』No.10、フォトブラネット、1992年10月、p.144)
3. ド・メイヤーとアジェーあるいは「ほら男爵」と「旅役者」の交わらな
い軌跡
(『ユリイカ ベル・エポック特集』、青土社、1992年12月、pp.142-
153)
4. 芳賀日出夫の写真あるいは遭遇への仕掛け (写真展カタログ『芳賀日出
夫 日本人の生と死のリズム』、慶應義塾大学アートセンター、1995年
12月、pp.8-11)

フランス語教科書

1. アロン・ジ！（共著）（白水社、東京、1992年）
2. フランス語に乾杯！（共著）（駿河台出版社、東京、1998年）

口頭発表・講演

1. ミシェル・ビュトールの作品における「夢」について
（日本フランス語フランス文学会、1982年秋）
2. 映画の誕生（横浜市民大学講座、1989年秋）
3. フランス文学と闘牛（小諸市民大学、2013年8月）

一次資料整理

1. 故永戸多喜雄名誉教授所蔵の演劇一次資料整理
故永戸多喜雄先生所蔵のフランス1950年代末（とりわけテアトル・デ・ナシオン発足当時）から1970年代の演劇一次資料を、分類・整理の上ナンバーをふり、エクセルファイルに詳細をまとめる。2013年に、一括して日吉メディア・センターに所蔵されることになる。